

41 お蔭参り、ええじゃないか

～幕末の諸相～

1 お蔭参り

「お蔭参り」は、江戸時代、ある特定の年に起こった庶民の熱狂的な伊勢神宮参拝現象を指し、抜け参りともいう。伊勢神宮参詣は庶民が楽しみにしていた旅行であった。このため、「伊勢講」という、村の仲間で費用を積み立てる会を結成し、順番に出かける計画を立てた。それは、外宮を農業神とし、内宮を種々の祈願の総合と捉え、すべての人々はまず伊勢神宮を信仰しようと考えたからであった。また、一方では各地に伊勢に出かけられるよう伊勢参宮を案内する御師とよばれる道者がいて、伊勢へ導いた。

伊勢参宮のうち、1650（慶安3）年、1705（宝永2）年、1771（明和8）年、1830（文政13）年の4回は特に規模が大きく、この時期のものを特に「お蔭参り」といつている。ほぼ60年を周期にしている点が注目されるが、なぜ群衆がこのような衝動的な行動をとったかはっきりしない。ただ宗教的狂気のなかに民衆の封建支配に対する不満を発散させるという役割を果たしたという。子が親に、妻が夫に、奉公人が主人に断りもなく路銀も持たずに出かけることも可能であった。これは、この期間中に宿々で路銀を旅人に施すなど、想を凝らした施行があったからでもある。1830年のお蔭参りは、「文政神異記」によれば、阿波国徳島佐古町八丁目の手習屋にあった手習子ども20～30人が、3月20日に一緒になって参宮するといつて出かけたことから全国に波及した。遠江国見付村では8月21日に旅人1人につき12文ずつを施したが、1日だけで約1,400～1,500人ほどになったという。したがって、貧しい参宮客でも沿道の施行によって伊勢の往復はできたであろう。

2 お蔭参りからええじゃないか



〈写真1〉1867年10月に三島宿に降った阿弥陀如来木像

幕末から明治へ移行する時期、1867（慶応3）年7月半ば頃から翌年4月頃にかけて、東海地方から近畿地方に「ええじゃないか」とよばれる民衆運動が突発的に起こった。この運動は民衆が踊りながら「ええじゃないか」「ようじゃないか」などと唱えたので「ええじゃないか」といつわれている。東海地方では「六根清浄」「このおかげさん」などといつていたようである。三島や伊豆地方では「お札降り」として史料にでてくる。この「ええじゃないか」踊りは、お蔭参りの変型したものといつ説がある。伊勢参宮では帰つてくると、天神社や伊勢神宮を祀っている神社へお札を奉納したり、行けなかった者へお札を配つたりしたからである。

これまでに知られている最も早い時期の「ええじゃないか」の事例は、7月14日の三河国牟呂村（愛知県豊橋市）である。その後、8月には新居宿・浜松城下・見付宿（磐田市）と波及し、9月以降、金谷・島田・藤枝・駿府から東進して三島など東海道宿駅やその近村に広がった。西

国筋には1868年1月までに西進し、備中・伊予・阿波あたりまで伝わった。

〈史料1〉など伊豆地域に残る記録類をもとに、「ええじゃないか」を再現しよう。1867年10月16日、沼津宿と三島宿の大中島町油屋へ大神宮のお札が降ったのをきっかけに、三島宿すべての大小の商家に八百万神や諸仏のお札が入り交じって降ったので大騒ぎになった。駿河国吉原宿あたりから三島明神へ、老若男女とも白衣を着け「六根清浄」と唱えながらそれぞれに目印を押し立てて参詣に向かった。田方郡田代村（伊豆市）の豪農遠藤莊八郎の1867年の手記には神札乱舞と八百万神の集会、その移動、老若男女の寒中の水垢離と氏神参詣、そして、修善寺から三島まで遠路を厭わぬ裸詣りなど、北伊豆のお札降りの様相を記録している。また、大仁村（伊豆の国市）でも10月にお札降りがあった。10月23日に妻良（南伊豆町）、11月1日には下田、長浜村（沼津市）、その後、伊豆西浦の木負・久連・江梨などにも降った。12月28日と翌

1868年元日には再び長浜村で、地藏尊・不動尊・池鯉鮒大明神のお守りが正月の門松に置かれていたなどとしている。下田では11月1日に降って以来8日まで連日のように降り、町民は市中を練り歩き、異形風体をする者がいるので町役人が取り締まろうとしたことが〈史料1〉にみえる。しかし、21日頃になっても一向に止む気配がなかった。また、1868年、八幡野村（伊東市）の鶴寿丸という船が相模湾を航行中、某神社の神符が舞い込み「お下り」と称した。この頃、伊豆の「ええじゃないか」お札降りは終息したものと思われる。〈史料1〉のようにお札降りがあると、伊豆では一之宮である三嶋大社へお札を納めに多くの老若男女が参詣している。

3 幕末の混乱と庶民

「ええじゃないか」をお蔭参りの変形とする理由は、お札が主に伊勢神宮のものであること、お札を納めに神社へ出かけることなどであるが、様態はかなり違ったものである。また、お札を降らせたのは国学運動を支持する神官たちではなかったか、という考えから草莽運動の広がりを展開する説もある。静岡県内でも神官を中心に駿州赤心隊や伊吹隊、遠州報国隊を結成し、神社を守る集団を組織した。そのなかで、駿州赤心隊のように直接官軍を支援する集団も生まれるが、多くは庶民を神社信仰へ向かわせたと考えられている。幕府支配への不満のはげ口ともいわれるが、直接的に討幕運動に民衆が加担したとも考えにくい。庶民にとっては祭りと同じ刺激を求めての騒ぎとも考えられる。しかし、結果的に幕府は民衆のこの騒ぎを抑えることができず、幕府の衰退ぶりを露顕することになった。

〈参考文献〉

坂部哲之「伊勢参宮と東海道」（『東海道交通史の研究』）

『伊豆長岡町史』中巻

田村貞雄「ええじゃないか始まる」（青木書店）

渡辺和敏「ええじゃないか」（愛知大学総合郷土研究所ブックレット）

豊橋市美術博物館『おかげまいりとええじゃないか』

〔史料1〕慶応三年十月〜十一月 下田町御札降り覚
十一月朔日 晴天西風
〔中略〕
一夕刻より御下り札所々これあり、市中練り歩き〔中略〕
十一月十日 晴天西風
一御札降り一件につき、市中今以つて練り歩き候につき、今晚限り明朝より堅く相止め、夫々渡世致すべく旨申し渡し方につき、会所一同出席の上、銘々町々町頭自身呼出し、余り長々にては跡々の義も思われ候につき、明朝より役人一同市中見廻り、もし心得違ひにて練り歩き候か、又は異形風体致し居り候者見掛け候はば、帳面に控え、其町々町役呼出し、急度相糺し候間、心得違ひこれなき様厳しく申し渡し方致し候事〔後略〕
〔下田市史〕資料編二近世 918頁